

宝石商

小川未明

青空文庫

昔、北の寒い国に、珍しい宝石が、海からも、また山からもいろいろたくさんに取れました。

それは、北の国にばかりあつて、南の方の国にはなかつたのであります。南の方の暖かな国は富んでいましたから、この珍しい宝石を持って売りにゆけば、たいそう金がもうかつたのであります。

けれど、質樸な北の方の国の人々は、そのことを知りませんでした。また、遠い南の国へゆくにしても、幾日も幾日も旅をしなければならぬ。船に乗らなければならぬし、また、車にも、馬にも乗らなければならぬ、容易なことではなかつたのであります。

ここに、智慧のある男がありました。その男は、北の国のものでもなければ、また、南の国のものでもなかつた。どこのものとも知れなかつたのであります。

この男は、北の国へいつて、宝石を集めてそれを南の国へ持ってゆけば、たくさんの金のもうかることだけは、よく知っていました。そのうえ、男は、よく宝石を見分けるだけの目を持っていました。

男は、ひともうけしようと思つて、北の国へまいりました。北の国は、まだよく開けていなかつたのです。高いけわしい山が重なりあつて、その頭を青い空の下にそろえています。また、紺碧の海は、黒みを含んでいます。そして高い波が絶えず岸に打ち寄せているのであります。

宝石商は、今日はこの港、明日は、かしの町というふうに進まわつて、その町の石や、貝や、金属などを商つている店に立ち寄つては、珍しい品が見つからないものかと目をさらにして選り分けていたのであります。

火の見やぐらの立つている町もありました。また、荷馬車がガラガラと夕暮れ方、浜の方へ帰つてゆくのに出あいました。

男は、珍しい品が見つかる、心の中では飛びたつほどうれしがりましたが、けつしてそのことを顔色には現しませんでした。かえつて、口先では、

「こんなものは、いくらもある、つまらない石じやないか。」といつて、くさしたのです。店のものは、よく知りませんから、そうかと思いましたが、めつたに見たことのない、珍しい美しい石だと思つていますものですから、

「そんなことはありませんまい。私どもは、長年石を探して歩いていますが、こういう珍

しい石はこれまで、あまり手に入れたことがないので。」と、店のものは答えました。すると、智慧のある宝石商は、わざと嘲笑いました。

「それは、おまえさんが、あまり世間を知らんからだ。この山を越えて、もつと遠い、遠い国の方までいってみれば、こんな石は、けつして珍しくない。もつと美しい石がいくらもあります。」

と、旅の宝石商はいいました。

店のものは、それはそうかもしれないと思いましたが。そして、赤い石や、青い石や、また海の底から取れた緑色の石や、山から取れた紫色の石などを安くその男に売ってしまったのです。

どこへいっても、その男は、口先が上手でありました。そして、珍しい石をたくさん集めました。彼は、それを持つて南の国へいって高く売れることを考えると楽しみでなりませんでした。それには、すこしでもたくさん持つてゆくほうがもうかりますから、男は、根気よく寂しい北国の町々を歩いていました。

そのうちに秋もふけて、冬になりました。寒くなると男は、早く南の国へゆくことを急ぎました。

ある日のこと、ものすごい波の音を後方に聞きつつ、宝石商は、さびしい野原を歩いていきますと、空から雪がちらちらと降ってきました。

「雪が降ってきたな。」と思つて、男はいつしうけんめいに路を急ぎました。けれどもいつまでたつても、人家のあるところへは出ませんでした。そして、だんだんさびしくなるばかりでした。雪はだんだん地の上に積もつて、どこを見ても、ただ真つ白なばかりであります。小川も、田も、畑も雪の下にうずもれてしまつて、どこが路やら、それすら見当がつかなくなつてしまつたのであります。

そのうちに、日が暮れかかつてきました。からすが遠いどこかの森の中で、悲しい声をたててないていました。

男は、早く町に着いて、湯に入つて暖まろうなどと空想をしていたのでありますが、いまは、それどころでなく、まったく心細くなつてしまいました。この分でしたら、すぐ四辺が真つ暗になるだろう。そして、そのうちに手足は凍えて、腹は空いて、自分はこのだれも人の通らない荒野の中で倒れて死んでしまわなければならぬだろうと考えました。

ちようど、そのときであります。真つ黒な雲を破つて、青くさえた月がちよつと顔を出

しました。そして、月つきはいいました。

「おまえがこの北きたの国くにの宝たからをみんな南みなみに持つていつてしまふ、その罰ばちだ。海うみも、山やまも、その宝たからがほかの遠とおい国くにへゆくのを悲かなしんでいるのだ。」と、月つきがすきとおる寒さむい声こゑでいったのです。

宝ほう石せき商しょうはびつくりして、空そらを仰あおぎますと、すでに月つきは真まつ黒くろな雲くもの中なかにその顔かおを隠かくしてしまいました。

宝ほう石せき商しょうは、ほんとうにびつくりしました。自分じぶんが、なにも知しらない商しょう人にんをだまして、いろいろ珍めづらしい宝ほう石せきを手てに入いれたものですから、心こころの中なかではあまりいい気き持もちがしなかつたのです。

寒さむさは、募つるばかりでありました。そして、腹はらはだんだん空すいてきました。もはや、この荒野あらのの中なかで、のたれ死じにをするよりほかになかつたのでした。

「ああ、ほんとうに、とんだことになったもんだ。いくら金かねもうけになるといつて、自分じぶんの命いのちがなくなつてしまつて、なんになろう。もう、みんなこの宝ほう石せきはいらない。だれか自分じぶんを助たすけてくれたら、どんなにありがたいだろう。」と、宝ほう石せき商しょうは、つくづくと思おもいました。

「神さま、どうぞ私の命を助けてください、そのかわり、持っている宝石は、一つもいませんから、どうぞ命を助けてください。」と、彼は念じたのであります。

すると、そのとき、怖ろしい、寒い大きな風が吹いてきました。林や、森にかかった雪がふるい落とされて、一時は、目も口も開けない有り様でありました。

彼は、もう自分は、いよいよ死ぬのだと思いました。そして、しばらく雪の上にすわつて闇を見つめて後先のことを考えました。

そのとき、彼は、かすかに、前方にあたつて、ちらちらと燈火のひらめくのをなめたのであります。いままで、がっかりとして人心地のなかつた彼は勇んで飛びあがりました。ああ、これこそ神さまのお助けだと思つて、その火影をただ一つの頼りに、前へ前へと歩き出したのであります。

宝石商は、やつとその燈火のさしてくるところにたどり着きました。それはみすぼらしい小舎でありました。中へ入つて助けを乞いますと、小舎の中には、おばあさんと娘が二人きりで、いろいろに火をたいて、そのそばで仕事をしていたのであります。

宝石商は、自分は旅のもので野原の中で道を迷つてしまつて、やつとの思いでここまでできたのであるが、一夜泊めてもらいたいと頼みました。

おばあさんと、娘は、それはお気の毒なことだといって、宝石商をいたわり、火をどんどんとたいて凍えた体を暖めてやり、また、おかゆなどを造って食べさせてくれました。

「私も貧乏で、お客さまにおきせする夜具もふとんもないのでございますが、せがれが獵師なもので、今夜は、どこか山の小屋で泊まりますから、どうぞそのふとんの中へ入ってお休みくださいまし。」と、二人はしんせつに、なにからなにまで、およぶかぎり真心を尽くしてくれました。

宝石商は、このお礼になにをやったらいだろうと思いました。彼は、自分の持っている宝石の一つを、この家のものに与えたなら、どんなに一家のものが幸福になろうと考えました。また、その宝石を金にしなくても、娘のくび飾りとしたら、どんなに美しく輝いて娘の心を喜ばせるであろうと思いました。

宝石商は、これよりほかにお礼のしかたはないと考えたのです。彼は、月が空の上でいったことを思い出しました。

「なんにしても命が助かったんだ。宝石の一つや二つに換えられない。」と、彼は思いながら、床の中に入ってから、包みを出して、おばあさんや、娘に気づかれないうちに、

一つ一つ宝石を選び分けてながめたのです。

すると、さすがに珍しい宝石だけあって、赤・緑・青・紫に輝いて、どれがほかのものより劣るといふことなく、見とれずにはいられなかつたのであります。

「南の国へさえ持つてゆけば、一つが幾百両にもなる品物ばかりだ。これをやるのは惜しい。こんなに高価なものをお礼にする必要はないのだ。どうせ、今度きた時分になにか持つてきてやれば、それで義理がすむのだ。」と、宝石商は考えなおしました。そして、その石をみんなもとのとおり包んで隠してしまいました。

おばあさんや、娘は、宝石商が寝てしまつてから、なお起きて仕事をしています。明くる日はいい天気でした。宝石商は、勇んで旅立ちの支度にかかりました。

「いろいろお世話になりましたがとうぞんじます。なにかお礼をすればいいのですが、いまはなにも持ち合わせがありません。いずれまたこの地方にきましたときに、お礼をいたします。」

と、宝石商はいいました。

「なんのお礼なんかいるものですか。この道をまっすぐにおいでなされると町に出ます。道中お気をつけておゆきなさいまし。」と、二人は見送ってくれました。

宝石商は、それから幾日も旅をしました。山を越え、河を渡り、あるときは船に乗り、そして、南の国を指して、旅をつづけました。やつと、南の国にきて、にぎやかな金持ちのたくさんに住んでいる町を訪ねますと、どうしたことか、その町は見つかりませんでした。そして、その跡に壊れた壁や、枯れた木などが立っていました。

宝石商は、夢を見るような気持ちでした。そして、そこを通りかかった人に、この町はどうなったのかといつてたずねました。

「二年ばかり前に大地震があつて、そのとき、この町はつぶれてしまいました。」と、その人はいいました。

「どこへみんないつてしまったのですか。」と、宝石商は、昔の繁華な姿を目に思い浮かべてたずねました。

「みんなちりぢりになつてしまったのです。そのとき、死んだ人もたくさんありました。また、ここからもつと南の方の町に移つたものもございます。」と、その人はいいました。

宝石商は、がっかりしてしまいました。せつかく、この町の金持ちをあてにして、わざわざ遠く北の国からやつてきたのに、むなしく帰らなければならぬということは残念でたまりませんでした。

彼は、海岸にきて岩の上に腰を下ろして、ぼんやりと海をながめながら考えていたのです。

「もつと、南の方へいったら、また、金持ちの住んでいる町があるかもしれない。その町をたずねてゆこうか？」と、思案にくれていたので。

そのとき、太陽は、西の海に沈みかかっています。海の上が真紅に燃えています。宝石商は、また、これからの長い旅のことなどを考えていましたときに、不意に大波がやってきました。そして、そばに置いた宝石の包みをさらってしまいましたのです。

宝石商は、気が狂わんばかりにあわてたのです。けれど、どうすることもできなかつたのであります。一夜泣き明かしたすえに、
「もう一度、北の国へゆこう。そして、宝石を探してこよう。」と、彼は思いました。それよりほかにいい方法がなかつたからであります。

宝石商は、この損をきつと償うだけの宝石をもう一度、北の国へいつて集めてこなければならぬと決心しました。彼の頭の中はそのことはいっぱいになりました。

彼は、昼も夜も、ろくろく眠らずに、宝石のことばかり考えて北の国にやってきまし

た。

北の国は雪で真つ白でありました。そして、寒い風が吹いていました。町から、町へと歩きましたが、一度、自分の歩いた町には、もう珍しい宝石は見つかりませんでした。すると、宝石商は、いまさら、失った赤・青・緑・紫の宝石が惜しくてしかたがなかつたのです。夜も外に立つて、そのことばかり考えていました。

このとき、青・赤・緑・紫の宝石が、夜の目にも鮮やかに、凍った雪の上に糸につながれたまま落ちていて輝いているのです。彼は、うれしさに胸がおどつて、それを拾おうと駆け出しました。すぐ目の前に落ちていたと思つた宝石のくび飾りは、いくらいつても距離がありました。彼は、血眼になつて、ただそれを拾おうと雪の中を道のついていないところもかまわずに駆け出したのでありました。そして、疲れて、目がくらんでつい雪の野原の中に倒れてしまいました。

その夜は、いつになく空が晴れていました。さえわたつた大空に、青・赤・緑・紫の星の光が、ちようど宝石のくび飾りのごとく輝いていたのであります。寒い風は、悲しい歌をうたつて雪の上を吹いて、木々のこずえは身震いをしました。永久に静かな北の国の野原には、ただ波の音が遠く聞こえてくるばかりでありました。

哀^{あわ}れな^{ほうせきしょう}宝^は石^は商^はは、ついに凍^{こご}えて死^しんでしま^った^のです。明^あくる朝^{あさ}、野^ののからすがそ
 の死^し骸^{がい}を^は発^は見^{けん}しま^した。

— 一九二〇・一二作 —

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「現代」

1921（大正10）年5月

※表題は底本では、「宝石商《ほうせきしょう》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：富田倫生

2012年5月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

宝石商

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>